

岸野 久 著『ザビエルと日本』（申）

書 評

岸野 久 著

『ザビエルと日本』

— キリシタン開教期の研究 —

申 東 珪

本書は著者の、ザビエルと日本情報に関する前書（『西欧人の日本発見 — ザビエル来日前日本情報の研究 —』、吉川弘文館、一九八九年）を引き継ぐもので、今年のザビエル来日四五〇周年に際して意味深く、ザビエル研究にまた新たな成果を付け加えた一冊である。

同書は、本論一一編と補論三編、史料紹介とで構成されている。まずその主な論点を目次に従って整理する。第一章「一五四八年一月二九日ゴア発イグナティウス・デ・ロヨラ宛アンジロー書翰 — 内容分析・書誌・翻訳 —」

日本人が横文字で西洋へ送った最初のものといわれるロヨラ宛のアンジロー書翰について、アンジローがポルトガル語で下書きし、これをもとにアンジローの教理指導に当

たっていたスペイン人コスメ・デ・トーレスがスペイン語に翻訳した後に、アンジローが署名したものとする。第二章「ザビエルの日本開教とポルトガル商人の役割」 ザビエル来日以前からのキリスト教伝播を強調し、来日したポルトガル商人達の活動とザビエルの日本開教との関係を考察し、日本開教の発端が従来のマラッカでのザビエルとアンジローの出会いではなく、その出会いを成功させるに至ったポルトガル商人達の諸活動にあるとする。第三章「イエズス会士エンリケ・エンリケスとタミル語」 布教活動の根幹となる言語問題をとりあげる。イエズス会士で初めてアジアの言葉を習得したエンリケ・エンリケスに注目し、彼がインド漁夫海岸で布教に成功したことが日本の布教にも影響を与えたとする。エンリケスに関する研究は日本で初めてで、インドでの布教活動と日本を関連づけたという意味で、その意義は大きい。第四章「フランシスコ・ザビエルのチナ情報と布教構想」 ザビエルの中国布教が、来日以後に、日本改宗を容易にするために計画されたという従来の学説を批判。ザビエルの中国情報と中国布教構想からその決意に至るまでの過程とその意図を考察し、中国布教は当初からザビエルの目的であったとする。第五章「フランシスコ・ザビエルの日本布教構想 — パイオニアとしての位置と役割 —」 ザビエルが来日以前から中国布教の意志

を持っていたことを踏まえ、彼が単に日本布教のみではなく、将来のアジア布教を見すえて布教組織を作ろうとしたとする。第六章「フランシスコ・ザビエルの日本開教とインド総督ガルシア・デ・サア」日本開教をめぐるインド総督ガルシア・デ・サアとザビエルの関係から、来日の企てがどのように具体化されたかについて考察し、ザビエルの日本布教をポルトガル国家事業（貿易など世俗の利益を伴う事業）の一環として位置づける。第七章「ザビエル宣教団におけるアンジローについて」ザビエル宣教団とともに鹿児島に上陸したアンジローの宣教団のなかでの働きに着目し、先行研究では評価されなかった彼を、日本キリシタン教会の信徒使徒職の第一号として位置づけている。第八章「ザビエル宣教団における市来ミゲルについて」ほとんど知られていないザビエル宣教団の一員であるミゲルに着目し、市来における彼の活動（市来集団の組織とそのリーダーとしての布教活動）から、彼をリーダーに育てたザビエルの日本布教における手腕を評価し、禁教下の薩摩で約半世紀間活動を続けた彼を鹿児島キリシタンの柱と高く評価する。第九章「ザビエル宣教団における二日本人について——ジョアネとアントニオ——」ザビエルと共に来日した、アンジロー以外の余り知られていない二人の日本人について考察。彼らの名前・身分・続柄等を解明し、彼らの

史苑（第五九卷二号）

役割が宣教師の世話を中心とする雑務担当者であったとして、宣教団での位置や日本布教体制との関連でその役割を明らかにする。第一〇章「ザビエルの通訳アンジローとフェルナンドスの働き——インドでのエンリケ・エンリケスとの比較において——」ザビエルの通訳であったアンジローとフェルナンドスの活動を、ザビエルとその部下エンリケスの経験と比較検討。ザビエルの日本での活動がインドでの経験に基づいたものであることを論証している。第十一章「仏教論争——初期キリシタン宣教師の仏教理解と論破——」来日したザビエルとその宣教団の、仏教との出会いから仏教論破に至るまでの経過と成果を、デウスをめぐる諸論争を通して検討すると共に、宣教団が来日当初から仏教理解につとめていたとの注目すべき指摘をする。

補論と史料紹介では、ザビエルとの直接的な関連はないが、幅広いザビエル研究の基盤となるもので重要な意味を持つといえる。まず一章「パウロ・デ・サンタ・フェ・池端弥次郎同一説について」では、パウロ、即ちアンジローがザビエルと最初に出会った時、池端弥次郎重尚は既に死亡していたことを論証し、同一説を完全に否定した。二章「永祿四年島津貴久のインド宛書翰作成に関する若干の問題」では、島津貴久がゴアのイエズス会インド管区長アントニオ及びインド副王フランシスコ・コウテイーニ宛に送った

日付・作成者・作成過程などをさらに明確にすることによって、領主の公式文書の作成が全面的に宣教師に委ねられていた事実を明らかにした。三章「永禄四年（一五六一）ポルトガル商人アフォンソ・ヴァス傷害致死事件について」では、前章で触れたインド副王宛の書翰を送る際のポルトガル商人アフォンソ・ヴァス傷害事件の真相を明らかにしている。最後の史料紹介では、ザビエル伝の基になるフランシスコ・ペレス著述の「インドにおけるイエズス会の起源に関するバードレ・F・ペレスの報告」を解釈を付けながら翻訳している。

以上のように、著者はザビエルのみではなく関連人物と関係史料を発掘・再検討することによって、ザビエル研究を実証的に高めるとともに、従来の研究を越える新しい地平を開拓することに成功している。その主な成果と特徴は次の四点である。一つめは、関連史料について、既知史料の厳密な史料批判と新たな史料の発見による史実の確定。二つめは、ザビエルだけでなく、共に来日した人々の役割を解明することで、ザビエル宣教師という組織単位概念を導入すると同時にその構造を明確にしたこと。三つめは、共に来日したアンジロー及び二人の日本人を宣教師の一員として捉え、彼らの役割を明らかにしたこと。四つめは、インド及び将来的な見通しとしての中国などの他地域も視

野に入れ、ザビエルの日本布教をアジア布教の一環として客観的かつ実証的に把握したことである。

ただ、同書の全体的なまとめがないことや、各章が同書の構成上どのような意味を持つかについての説明（構成上の位置づけ）が十分でないこと、明確な論拠が提示されていないところ、例えば、第三章でエンリケスのインドでの布教活動の日本への影響に関する個所など、があることは少し残念である。しかし、それも著者がイタリア・ポルトガル・スペイン・カナダまで自ら足を運んで得た、生々しい史料による研究成果と比べればさしたる問題ではない。今後、著者が自ら同書で記したように、ザビエルは平戸・山口・京都・豊後までも足を延ばしており、鹿児島滞在以後の彼に関する新たな研究の展開を期待する。最後に、著者の本来の意図を十分理解できず、誤解・曲解の点があるとすれば、それはすべて筆者の未熟の故であり、著者の御寛恕を乞いたい。

（岸野久著『ザビエルと日本——キリシタン開教期の研究——』吉川弘文館、一九九八年、A5版・三八四ページ、七六〇〇円）

（本学文学研究科博士課程後期）

藤木久志先生の略歴と著作目録

- 一九八五年 四月 立教大学大学院文学研究科史学専攻主任（～八七年三月）
 一九八六年 七月 文学博士（東北大学）
 一九八八年一月 立教大学史学会会長（一年間）
 一九九九年 三月 立教大学を定年退職予定

著 作 目 録

(一) 著書

- 一九七四年 『戦国社会史論—日本中世国家の解体』
 一九七五年 『日本の歴史15 織田・豊臣政権』
 一九八五年 『豊臣平和令と戦国社会』
 一九八七年 『戦国の作法—村の紛争解決』（平凡社選書）
 『戦国大名の権力構造』
 一九九五年 『雑兵たちの戦場—中世の傭兵と奴隷狩り』
 一九九五年 『戦国史をみる目』
 一九九七年 『戦国の村を行く』（朝日選書）
 一九九七年 『村と領主の戦国世界』
 一九九八年 『戦国の作法—村の紛争解決』（増訂版、平凡社ライブラリー）

（松本 保・舘鼻 誠 編）

- 東京大学出版会
 小学館
 東京大学出版会
 平凡社
 吉川弘文館
 朝日新聞社
 校倉書房
 朝日新聞社
 東京大学出版会
 平凡社

(二) 共編著書

- | | | |
|-------|-------------------------------|----------|
| 一九五九年 | 『日本の歴史7 天下統一』 | 読売新聞社 |
| 一九六三年 | 『水戸市史』上巻 | 水戸市 |
| 一九六五年 | 『奥山庄史料集 新潟県文化財調査報告書10』 | 新潟県教育委員会 |
| 一九六六年 | 『人物・日本の歴史6 戦国の群雄』 | 読売新聞社 |
| 一九七四年 | 『論集日本歴史6 織豊政権』 | 有精堂 |
| | 『シンポジウム日本歴史7 中世国家論』 | 学生社 |
| 一九七五年 | 『影印北越中世文書』 | 柏書房 |
| 一九八二年 | 『豊田武著作集1 座の研究』 | 吉川弘文館 |
| | 『新潟県史 資料編3 中世一文書編Ⅰ』 | 新潟県 |
| | 『東松山市史 資料編2 古代～中世文書・記録・板石塔婆編』 | 東松山市 |
| 一九八三年 | 『新潟県史 資料編4 中世二文書編Ⅱ』 | 新潟県 |
| 一九八四年 | 『戦国大名論集14 毛利氏の研究』 | 吉川弘文館 |
| | 『新潟県史 資料編5 中世三文書編Ⅲ』 | 新潟県 |
| 一九八五年 | 『東松山の歴史』上巻 | 東松山市 |
| | 『戦国大名論集17 織田政権の研究』 | 吉川弘文館 |
| 一九八六年 | 『週刊朝日百科日本の歴史26 一向一揆と石山合戦』 | 朝日新聞社 |
| 一九八七年 | 『新潟県史 通史編2 中世』 | 新潟県 |
| 一九九〇年 | 『ジュニア・ワイド版 日本の歴史3―内乱から統一へ』 | 集英社 |
| 一九九二年 | 『中世庄屋史料の研究―一四～一七世紀村落の体系的追究』 | |

(平成三年度科学研究費補助金研究成果報告書一般研究C 研究代表者)

藤木久志先生の略歴と著作目録

- 一九九三年 『朝日百科日本の歴史・別冊 歴史を読みなおす15 城と合戦―長篠の戦いと島原の乱』 朝日新聞社
 一九九〇年 『反町茂雄文庫目録』 一卷 長岡市立図書館
 『朝日百科日本の歴史・別冊 歴史を読みなおす13 家・村・領主―中世から近世へ』 朝日新聞社
 『反町茂雄文庫目録』 二巻 長岡市立図書館
 『長岡市史 通史編』 長岡市
 『莊園と村を歩く』 校倉書房
 一九九七年

(三)論文等

- 一九五七年 「三浦和田中條家文書(一)」(工藤定雄氏と共編)『歴史』一五
 一九五八年 「三浦和田中條家文書(二)」(工藤定雄氏と共編)『歴史』一六
 「国人領主制の確立過程―越後三浦和田氏の惣領制」(『文化』二一―三、のち「遠隔地における国人領主制と惣領職」と改題し『戦国社会史論』に収録)
 「三浦和田中條家文書(三)」(工藤定雄氏と共編)『歴史』一七
 「三浦和田中條家文書(四)」(工藤定雄氏と共編)『歴史』一八
 「上杉氏知行制の構造的特質―織豊期大名論のこころみ」(『史学雑誌』六九―一二)
 「戦国大名覚書」(『日本歴史』一四七、のち『戦国大名の権力構造』に収録)
 「共同討議『惣領制をめぐって』の記録から」(佐藤進一氏他と連名)『中世の窓』六
 「共通論題『戦国から近世へ』討論記録」(『史学雑誌』六九―一〇)
 「家臣団の編成」・「文禄慶長期の知行制」(『藩制成立史の総合研究 米沢藩』第二・三章) 吉川弘文館
 「論評 豊臣政権の二三の問題―大島正隆氏の論文の紹介」(『国史談話会雑誌』六、のち「豊臣期大名論の視角―大島正隆氏『北奥羽大名領成立過程の一断面』によせて」と改題し『戦国大名の権力構造』に収録)
- 一九六三年

「江戸氏の水戸地方支配」(『水戸市史』上巻、のち「常陸の江戸氏」と改題し『江戸氏の研究』名著出版に収録)

「佐竹氏の領国統一」(『水戸市史』上巻、のち第四節を除き「豊臣期佐竹領国の構造」と改題し『戦国大名の権力構造』に収録)

一九六四年
「豊臣期大名論序説—東国大名を例として—」(『歴史学研究』二八七、のち『戦国大名の権力構造』に収録)
一九六五年
「大名領国の経済構造」(永原慶二編『日本経済史大系2 中世』東京大学出版会、のち『戦国社会史論』に収録、ついで『戦国大名論集8』に収録)

「中世東国地方史の諸問題」(『地方史研究』七六)

一九六六年
「戦国大名制下の守護職と段銭—永正と天文期の伊達氏について—」(『歴史』三二、のち「知行制の形成と守護職」と改題し『戦国社会史論』に収録、ついで『戦国大名論集2』に収録)

「戦国大名制下における買地安堵制—永正と天文期の伊達氏について—」(『地方史研究』八〇、のち「知行制の形成と守護職」と改題し『戦国社会史論』に収録、ついで『戦国大名論集2』に収録)

一九六七年
「戦国法形成過程の一考察—非分国法系大名法について—」(『歴史学研究』三二三、のち「戦国法の形成過程」と改題し『戦国社会史論』に収録)

「統一権力と東北大名」(『東北の歴史』上巻) 吉川弘文館

「貫高制と戦国の権力編成—村田・宮川・佐々木(潤)三氏の所論に学ぶ—」(『日本史研究』九三、のち「貫高制論の課題—村田・宮川・佐々木(潤)三氏の説をめぐって」と改題し『戦国社会史論』に収録)

一九六八年
「中世後期における三浦和田氏について」(『新潟史学』一、のち「国人領の変動と大名権力」と改題し『戦国社会史論』に収録)

一九六九年
「室町・戦国期における在地法の一形態—人返法の検討を中心として—」(『聖心女子大学論叢』三一・三二合併号、のち「在地法と農民支配」と改題し『戦国社会史論』に収録)

「戦国大名について」(『日本の歴史 別巻 日本史の発見』読売新聞社、のち「戦国大名論の動向」と改題し『戦国大名の権力構造』に収録)

「戦国期の「撰銭」問題と在地の動向」(『歴史学研究』三四八、のち「撰銭令と在地の動向」と改題し『戦国社会史論』に収録)

「戦国期の権力と諸階層の動向―「百姓」の地位をめぐって―」(『歴史学研究』三五一、のち「百姓」の法的地位と「御百姓」意識」と改題し『戦国社会史論』に収録、ついで『戦国大名論集1』に収録)

「中世後期の政治と経済」(『日本史研究入門Ⅲ』東京大学出版会、のち四節のみ「土一揆と村落―小領主・地主論をめぐって」と改題し『戦国社会史論』に収録、四節以外は『戦国大名の権力構造』に収録)

「戦国の動乱」(『講座日本史3 封建社会の展開』東京大学出版会、のち「戦国期社会における中間層の動向」と改題し『戦国社会史論』に収録)

一九七二年 「戦国期の社会矛盾」(『シンポジウム日本歴史10 織豊政権論』学生社)

一九七三年 「朝倉始末記 賀越闕諍記 越州軍記」(井上鋭夫氏と校注)(『日本思想大系17 蓮如 一向一揆』岩波書店)

「戦国乱世の女たち」(『日本女性史3 彼岸に生きる中世の女』評論社、のち『戦国史をみる目』に収録)

「戦国期の土地制度」(『体系日本史叢書6 土地制度史1』山川出版社、のち「荘園制解体期の村落と領主」と改題し『戦国社会史論』に収録)

「戦国争乱・戦国大名」(『中世史ハンドブック』近藤出版社)

「貫高制(貫文制)」(『中世史ハンドブック』近藤出版社)

「在地領主の高利貸機能について―文明く大永期、近江朽木氏の財政帳簿の分析―」(豊田武教授還暦記念会編『日本古代・中世史の地方的展開』吉川弘文館、のち「畿内型の在地領主と高利貸機能」と改題し『戦国社会史論』に収録、ついで『戦国大名論集5』に収録)

一九七四年

『戦国大名と百姓』（『日本民衆の歴史3 天下統一と民衆』三省堂）
『朝鮮出兵と民衆』（『日本民衆の歴史3 天下統一と民衆』三省堂、のち「朝鮮侵略と民衆」と改題し『戦国史をみる目』に収録）

『虜囚の故郷をたずねて―秀吉の朝鮮侵略が残したもの』（『高校社会科資料』七四―七、八 三省堂、のち『戦国史をみる目』に収録）

『文献目録』（『論集日本史6 織豊政権』有精堂）

一九七五年

『秀吉の朝鮮侵略』（中村栄孝氏他との座談会）（『日本の歴史15 織田・豊臣政権』月報一五 小学館）

『統一政権の成立』（『岩波講座日本歴史9 近世1』岩波書店、のち「織田政権の成立」と改題し『戦国大名の権力構造』に収録）

『大名領国制論』（『大系日本国家史2』東京大学出版会、のち『戦国大名の権力構造』に収録）

『解題 上杉謙信・景勝文書』（『影印北越中世文書』柏書房）

一九七六年

『一在地領主の勸農と民俗―色部氏年中行事ノート』（『新潟史学』九、のち「在地領主の勸農と民俗」と改題し『戦国の作法』に収録）

一九七七年

『織田信長の政治的地位について』（『戦国時代』吉川弘文館、のち「織田信長の政治的地位」と改題し『戦国大名の権力構造』に収録）

一九七八年

『北奥から見た豊臣政権』（八戸市民大学講座講演集『伝統と未来』）

『中世奥羽の終末』（『中世奥羽の世界』東京大学出版会、のち「関東奥両国惣無事令の成立」と改題し『豊臣平和令と戦国社会』に収録）

『関東・奥両国惣無事令について』（『戦国の兵士と農民』角川書店、のち『戦国大名論集18』に収録、ついで「関東奥両国惣無事令の成立」と改題し『豊臣平和令と戦国社会』に収録）

藤木久志先生の略歴と著作目録

一九七九年

「教育的配慮論と検定基準論―検定と歴史学の方法」〔『歴史学研究』四七四〕

「自由都市論から封建都市論への転換」〔『史潮』新六、のち「自由都市論から封建都市論へ―魚住昌良『ヨーロッパ中世都市史の研究状況』によせて」と改題し『戦国大名の権力構造』に収録〕

一九八〇年

「豊臣政権の九州国分令について」〔『日本中世の政治と文化』吉川弘文館、のち「豊臣九州停戦令と国分」と改題し『豊臣平和令と戦国社会』に収録〕

「松山城主案独斎のこと」〔『新編埼玉県史 資料編6 中世2』付録「新編埼玉県史だより」〕

「戦国北信のこと」〔『かみくひむし』四〇〕

一九八一年

「惣無事令のこと―永原説によせて―」〔『戦国史研究』二、のち『豊臣平和令と戦国社会』に収録〕

「検定基準適用の実態と問題点―藤木久志証人意見書」〔『家永教科書裁判 裁かれる日本の歴史 高裁編』第九巻〕

一九八二年

「先生の書き込み―『座の研究』の編集に寄せて」〔『豊田武著作集6 中世の武士団』付録 吉川弘文館〕

一九八三年

「かんだか 貫高」〔『国史大辞典』三巻 吉川弘文館〕

「かんだかせい 貫高制」〔『国史大辞典』三巻 吉川弘文館〕

「豊臣惣無事令と上野沼田領問題―統一における平和と戦争」〔『群馬県史研究』一七、のち「関東惣無事令の展開」と改題し『豊臣平和令と戦国社会』に収録〕

「豊臣政権の『喧嘩停止』令」〔『戦国史研究』五、のち「豊臣喧嘩停止令の発見」と改題し『豊臣平和令と戦国社会』に収録〕

「地域史編さんと中世史」〔『新潟県史 資料編4 中世二文書編Ⅱ』付録「新潟県史しおり」〕

「戦国大名の和与と国分―合従連衡の条件」〔『月刊百科』二四八、のち「戦国大名の和与と国分」と改題し

『豊臣平和令と戦国社会』に収録〕

一九八四年

「村落自検断禁令の近世的展開」〔『新潟県史研究』一四、のち『日本歴史民俗論集4』に収録し、ついで「徳川喧嘩停止令の展開」と改題し『豊臣平和令と戦国社会』に収録〕

書評 北島万次著『朝鮮日々記・高麗日記』〔『歴史学研究』五二三、のち「惣無事令と朝鮮侵略―北島万次『朝鮮日々記・高麗日記』によせて」と改題し『豊臣平和令と戦国社会』に収録〕

解説〔『戦国大名論集14 毛利氏の研究』吉川弘文館、のち「毛利氏の研究動向」と改題し『戦国大名の権力構造』に収録〕

「豊臣喧嘩停止令の発掘」〔UPJ一三七、のち「豊臣喧嘩停止令の発見」と改題し『豊臣平和令と戦国社会』に収録〕

「書評・紹介 北西弘著『一向一揆の研究』」〔『仏教史学研究』二六二〕

一九八五年

「戦乱の世」〔『東松山の歴史』上巻〕

「一向一揆論」〔講座日本歴史4 中世2』東京大学出版会、のち『戦国史をみる目』に収録〕

「新行・吉井報告に寄せて」〔『日本史研究』二七三〕

「村落における山論の体系―近世初期会津領の山論」〔『福島地方史の展開』名著出版、のち「近世初頭の村落間相論」と改題し『豊臣平和令と戦国社会』に収録〕

「村の扶養者」〔『戦国史研究』一〇、のち『戦国の作法』に収録〕

解説〔『戦国大名論集17 織田政権の研究』吉川弘文館、のち「織田政権論の動向」と改題し『戦国大名の権力構造』に収録〕

「一九八五年度歴史学研究会大会報告批判 全体会批判―高木昭作『惣無事令』について、椋川一朗『神の平和』運動とドイツ農民の私戦慣行」〔『歴史学研究』五四九〕

「HIDEYOSHI By Mary Elizabeth Berry」〔*The Journal of Japanese Studies* 11-1、のち「豊臣・連邦国家論の提起―M・E・ベリー『秀吉』によせて」と改題し『戦国大名の権力構造』に収録〕

藤木久志先生の略歴と著作目録

「検定の建前と実態について―第一次訴訟審関係 原告側証言・同反対尋問」(『裁かれる日本の歴史 高裁編』第八巻)

「上杉謙信の印象」(『北国の雄 上杉謙信』三河武士のやかた家康館)

「東国惣無事令の発令」(『かみくひむし』六〇、のち『戦国史をみる目』に収録)

「戦国の城と町」(『立教大学文学部総合研究論集』のち『戦国史をみる目』に収録)

「言葉戦い考」(『政治社会史論叢』近藤出版社、のち『言葉戦い』と改題し『戦国の作法』に収録)
「上野戦国三題」(『群馬県史 資料編7 中世3』付録「群馬県史しおり」)

「身代り・わびごとの作法」(『月刊百科』二八四、のち「身代わりの作法・わびごとの作法」と改題し『戦国の作法』に収録)

「教科書裁判『鈴木判決』を読んで」(『歴史学研究』五五七)

「村の逐電」(『戦国史研究』一二、のち「逐電と放状」と改題し『戦国の作法』に収録)

「解説」(『戦国大名論集5 近畿大名の研究』吉川弘文館)

「門徒ハミナ開山ノ門徒ナリ―一向一揆の世界」(『週刊朝日百科日本の歴史26 一向一揆と石山合戦』朝日新聞社)

「一揆よ起て―石山戦争」(『週刊朝日百科日本の歴史26 一向一揆と石山合戦』朝日新聞社)

「旅する宗主―漂泊者の面影」(『週刊朝日百科日本の歴史26 一向一揆と石山合戦』朝日新聞社)

「村の検断と褒美」(『中世・近世の国家と社会』東京大学出版会、のち「落書・高札・褒美」と改題し『戦国の作法』に収録)

「上杉謙信の画像」(『新潟県史 通史編2』)

「上杉家の花押と印章」(『新潟県史 通史編2』)

「豊臣期の文壇」(『新潟県史 通史編2』)

一九八七年

一九八八年

『豊臣の平和』によせて―民衆はいつも被害者か（『歴史地理教育』四一三、のち『歴史地理教育実践選集』一一、『戦国史をみる目』に収録）

『豊臣の百姓越訴令―酒井氏の批判によせて』（『戦国史研究』一四、のち改稿し『村と領主の戦国世界』に収録）

『境界の裁定者―山野河海の紛争解決』（『日本の社会史2』岩波書店、のち『村と領主の戦国世界』に収録）
『村請けの誓詞―豊臣支配と百姓起請文』（『中世東国史の研究』東京大学出版会、のち『村と領主の戦国世界』に収録）

『川と沼と水の歴史―執筆者への便り』（『関城町の歴史』八、のち『戦国史をみる目』に収録）

『陸奥刀狩の新史料』（昭和六一）六二年度科学研究費補助金総合研究A 研究成果報告書『北日本中世史の総合的研究』東北大学文学部、のち『奥羽刀狩事情』と改題し『北日本中世史の研究』に収録）

『追記』（中野豈任『祝儀・吉書・呪符―中世村落の祈りと呪術』吉川弘文館）

『移行期村落論』（『日本中世史研究の軌跡』東京大学出版会、のち『村と領主の戦国世界』に収録）

『村の惣堂・村の惣物』（『月刊百科』三〇八、のち『村と領主の戦国世界』に収録）

『刀指の祝い』（『戦国史研究』一六）

『地域信仰論』の方法によせて（中野豈任『忘れられた霊場―中世心性史の試み』解説、平凡社）

『座談会 中野豈任氏の足跡を偲ぶ』（『かみくひむし』七〇）

『市民一揆のシンポジウム』（北陸中日新聞、のち『戦国史をみる目』に収録）

『村の隠物・預物』（『ことばの文化史 中世1』平凡社、のち『村と領主の戦国世界』に収録）

一九八九年
『境界の世界・両属の世界―戦国のトークン・越後国小川庄をめぐって』（『かみくひむし』七二、のち『戦国史をみる目』に収録）

「村の当知行―ムラのナワバリ」(『戦国期職人の系譜』角川書店、のち『村と領主の戦国世界』に収録)

「新刊紹介・荒野泰典『近世日本と東アジア』」(『史苑』四九卷一号)

「莊園の歳時記―山科家の代官日記を読む」(『週刊朝日百科日本歴史・別冊歴史の読み方9』朝日新聞社、のち『戦国の村を行く』に収録)

「戦国の東蒲原(小川庄)―両属の世界・境界の世界」(『阿賀路』二七、のち『戦国史をみる目』に収録)

「私にとつての一向一揆」(『加賀一向一揆一五〇〇年』能登印刷出版部、のち『戦国史をみる目』に収録)

「村の牢人―『村の扶養者』再考」(『戦国史研究』一八)

「村の入札―多数決の習俗」(『週刊朝日百科日本の歴史・別冊歴史の読み方6』朝日新聞社、のち『戦国の村を行く』に収録)

「村堂の落書―『忘れられた霊場』によせて」(『角川日本地名大辞典月報』四四、のち『戦国の作法』平凡社ライブラリー版に収録)

「戦国望郷の歌―蘆名滅亡によせて」(会津史学会『歴史春秋』三〇)

「奥羽刀狩事情―付、廃刀令からの視点」(『北日本中世史の研究』吉川弘文館、のち「廃刀令からの視点」と改題し『戦国史をみる目』に収録)

「戦国の村と城―大宮の戦国をしのぶ」(第一三回特別展図録『寿能城と戦国時代の大宮』大宮市立博物館、のち『戦国史をみる目』に収録)

「村の公事―上納と下行の習俗」(『戦国期東国社会論』吉川弘文館、のち『村と領主の戦国世界』に収録)
「武装する村」(第一七回マドリード国際歴史学会議報告『歴史学研究』六一八、のち『戦国史をみる目』に収録)

「シンポジウムによせて―二つの発言を敷衍して」(シンポジウム「奥羽―一揆・仕置」に対するコメント

一九九二年

一九九〇年

『歴史』七六)

「刀狩りをみる目―いま、なぜ刀狩りか」(『歴史評論』四九三、のち『戦国史をみる目』に収録)

「村の跡職」(『内乱史研究』一一、のち『村と領主の戦国世界』に収録)

一九九二年

「村の指出―上納と下行の習俗」再考(『近世日本の民衆文化と政治』河出書房新社、のち『村と領主の戦国世界』に収録)

「領主の危機管理―領主の機能Ⅱ存在理由を問う」(第一九回大学院史学大会記念講演『駒沢大学史学論集』、のち『戦国史をみる目』に収録)

「イングランドの法や習俗に学ぶ―加藤哲実著『法の社会史』」(『歴史評論』五〇五)

「刀狩―兵と農の分かれた社会へ」(『見る・読む・分かる日本の歴史』3 近世) 朝日新聞社

一九九三年

「村の動員―『中世の兵と農』への予備的考察」(『中世の発見』吉川弘文館、のち『村と領主の戦国世界』に収録)

「中世鎌倉の祇園会と町衆」(『神奈川地域史研究』一一、のち『戦国の村を行く』に収録)

「村の城・村の合戦」(『朝日百科日本の歴史・別冊 歴史を読み直す』15 朝日新聞社、のち『戦国の村を行く』に収録)

「戦いの後に―三つの刀狩」(『朝日百科日本の歴史・別冊 歴史を読み直す』15 朝日新聞社)

一九九四年

「村からみた戦国大名」(新潟県十日町市博物館講演『長岡市史研究』五、のち『戦国史をみる目』に収録)

「書評 山内進『略奪の法觀念史―中・近世ヨーロッパの人・戦争・法』」(『歴史学研究』六五七、のち『戦国史をみる目』に収録)

「戦場の奴隷狩り・奴隷売買―戦場の社会史によせて」(『内乱史研究』一五)

「村から見た領主―その存在理由を問う」(『朝日百科日本の歴史・別冊 歴史を読み直す』13 朝日新聞社、

藤木久志先生の略歴と著作目録

のち『戦国の村を行く』に収録)

「戦場の商人―戦場の社会史によせて」(『戦国史研究』二八、のち『戦国の村を行く』に収録)

「一九九四年度歴史学研究会大会報告批判」(『歴史学研究』六六六)

一九九五

「生命維持の習俗三題」(『遙かなる中世』一四)

「戦場の村の危機管理」(『荘園に生きる人々―『政基公旅引付』の世界』和泉書院、のち『戦国の村を行く』に収録)

「鷹と王権」(『朝日百科日本の歴史・別冊 歴史を読み直す18』朝日新聞社)

Le village et Son Seigneur - Domination sur le terrior, autodéfence et justice, *Annales : Histoire,*

Sciences Sociales, 50-2 (Mars - Avril 1995).

一九九六

「永禄三年徳政の背景―歴史のなかの危機―にどう迫るか」(『戦国史研究』三一)

「中城研の未来に―合戦論から戦争論へ」(『中世城郭研究』一〇)

「村の城をみる目」(『中世城郭研究』一〇、のち『戦国の村を行く』に収録)

「飢餓と戦争からみた一向一揆」(『講座蓮如』第一巻、平凡社)

一九九七

「山城停止令のこと」(『戦国史研究』三三)

「村の越訴」(「豊臣の百姓越訴令」の改稿、「村と領主の戦国世界」に収録)

「村の世直」(『村と領主の戦国世界』に収録)

「応仁の乱のキーワード」(朝日新聞社『二冊の本』第二巻六号)

「戦国民衆像の虚実」(『UP』二六巻六号)

「村の傭兵―駿河大平郷」(『荘園と村を歩く』に収録)

「『乱』と村人たちの籠城」(『西海の乱』一四)

『鎌倉公方の春——中世民俗誌としての『鎌倉年中行事』』（『六浦文化研究』七）

「戦場の村」（『静岡県史 通史編2中世』）

「中世の生命維持の習俗」（『成城大学民俗学研究所紀要』二二）

一九九八年
一九九九年
「日本中世の女性たちの戦場」（『総合女性史研究』一六 三月刊行予定）

「山城停止令の伝承を訪ねて」（『史苑』五九卷二号）

「中世戦場の略奪と傭兵——『応仁の乱』の戦場から」（国立歴史民俗博物館編『人類にとつての戦いとは③』）

戦いと民衆』東洋書林、近刊）

「戦場の雑兵たち——戦国時代の戦場で何が起きていたか」（新潟県立文書館『研究紀要』五）

*日本中世史ゼミ——村の調査とその成果

藤木久志先生のゼミ（日本中世史演習）は、その運営が学部生と院生に任せられ、大学内外の参加者がひとつになつて取り組む史料読みと、夏季のフィールドワークに重点をおいて、お互いに研究方法を錬えあつてきました。ここでは、聖心女子大学以来つづいた夏の調査先と、フィールドワークの成果をまとめた報告書や論文のリストを紹介します。

一九六九年 吉田庄とその周辺（広島県高田郡吉田町）

一九七〇年 大山庄（兵庫県丹南町）

一九七一年 今堀（滋賀県八日市市）

一九七二年 菅浦庄（滋賀県西浅井町）

一九七三年 宝蔵院文書（新潟県中頸城郡妙高村）

一九七四年 宝蔵院文書（新潟県中頸城郡妙高村）

藤木久志先生の略歴と著作目録

一九七五年

吉田庄（広島県高田郡吉田町）・多治比（同）・甲立（同郡甲田町）

関山村・宝蔵院文書・関山神社文書（新潟県中頸城郡妙高村）

一九七六年

伊豆内浦（静岡県沼津市）、関山村・関山神社文書（新潟県中頸城郡妙高村）

一九七七年

関山村・関山神社文書・内田家文書（新潟県中頸城郡妙高村）

浅見恵「宝蔵院日記にみる越後関山『火祭』史料」（『史苑』三七卷二号、日本史実習報告(1)）
一九七七年

浅見恵「宝蔵院日記にみる越後関山『火祭』史料」（『史苑』三九卷二号、日本史実習報告(2)）
一九七九年

浅見恵「宝蔵院日記総目録・永禄五年妙高山五位野流縁起写」（『史苑』四一卷一号、日本史実習報告(4)）一九八一年

一九七八年

一乗谷（福井県福井市）

一九七九年

本覚坊文書（新潟県上越市）

一九八〇年

本覚坊文書（新潟県上越市）、北信濃地域

松本裕子・泊清尚「一向宗越後本覚坊の中世文書について―下間氏発給の懇志請取状群の整理―」

（『史苑』四〇卷一号、日本史実習報告(3)）一九八〇年

泊清尚・立教大学日本史実習中世班（藤木久志）「中世末本随寺懇志請取状の研究―越後中頸城郡本覚坊文書について―」（『新潟県史研究』一〇）一九八一年

一九八一年

鵜庄（兵庫県太子町）

一九八二年

鵜庄（兵庫県太子町）

一九八三年

好島庄（福島県いわき市）

館鼻誠・小林一岳・飯野光世「好島庄調査報告書（一）」『中世の東国』八 一九八四年
好島庄（福島県いわき市）

館鼻誠・小林一岳・飯野光世「好島庄調査報告書（二）」『中世の東国』一二 一九八七年

一九八五年 法隆寺周辺村落・大方家文書（奈良県斑鳩町）

一九八六年 薬師寺周辺村落（奈良県奈良市）、大方家文書（奈良県斑鳩町）

館鼻誠「大和国大方家文書 稿本」『中世庄屋史料の研究』平成三年度科学研究費補助金研究成果報告書一般研究C 一九九二年

一九八七年 安治村（滋賀県中主町）

一九八八年 村松村（新潟県長岡市）

『村は北谷にあった―長岡市村松の中世を歩く』『長岡市双書』一〇 一九九〇年

松本保「地域の霊場」〔「荘園と村を歩く」校倉書房〕一九九七年

一九八九年 栖吉村（新潟県長岡市）

立教大学日本中世史研究会「栖吉の里に中世を求めて」『長岡市史研究』二 一九九一年

一九九〇年 芹川村（新潟県長岡市）・江良浦（福井県敦賀市）

立教大学日本中世史研究会「土手に囲まれた村―川西Ⅱ芹川の中世を歩く―」『長岡市史研究』三 一九九二年

一九九一年 矢代浦・宮川保（福井県小浜市）、江良浦（福井県敦賀市）

小林一岳「江良浦の習俗と石造物」『中世庄屋史料の研究』平成三年度科学研究費補助金研究成果報告書一般研究C 一九九二年

稲葉継陽「戦国の海村」〔「荘園と村を歩く」校倉書房〕一九九七年

藤木久志先生の略歴と著作目録

一九九二年 五百井庄・大方家文書（奈良県斑鳩町）

館鼻誠「村の動揺」（『莊園と村を歩く』校倉書房）一九九七年

一九九三年 加太庄（和歌山県和歌山市）

藏持重裕「海浜の莊園」（『莊園と村を歩く』校倉書房）一九九七年

一九九四年 小倭郷（三重県一志郡白山町）

矢島有希彦・福原圭一・窪田涼子「成願寺・城・五輪塔」（『莊園と村を歩く』校倉書房）一九九七年

一九九五年 虎岩村（長野県飯田市）

一九九六年 虎岩村（長野県飯田市）

小林一岳「近世初期虎岩村の家」（『信濃』四八一―一二）一九九六年

窪田涼子「虎岩村絵図を読む」（『信濃』四八一―一二）一九九六年

船橋篤司・根本崇「戦国虎岩の人と耕地―天正検地帳からの復元」（『信濃』四八一―一二）一九九六年

福原圭一「虎岩の城と館」（『信濃』四八一―一二）一九九六年

稲葉継陽「村の御蔵と年貢収納・種貸・つなぎ―一七世紀初頭虎岩村の機能と連帯」（『信濃』四八一―一二）一九九六年

一九九六年

黒田基樹「戦国・豊臣期の『平沢文書』と平沢氏」（『信濃』四九七―七）一九九七年

一九九七年 小倭郷（三重県一志郡白山町）

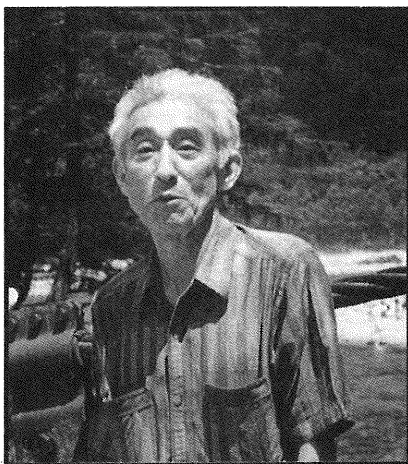
矢島有希彦・阿諏訪青美・涌井美夏・窪田涼子「戦国期小倭成願寺と村の復元」（『三重県史研究』一四）一九九八年

一九九八年

一九九八年 日根庄（大阪府泉佐野市）

成果は『泉佐野市史研究』に掲載の予定

追悼後藤均平先生



1995年8月 上高地にて

立教大学名誉教授 後藤均平先生は、一九九八年七月三日午前六時三四分、呼吸不全のため逝去されました。享年七十二歳。告別式は七月六日午前十一時から杉並区梅里の清見寺光雲閣にて行われました。後藤均平先生の本学史学会と本学史学科に対する多大な御貢献に感謝の念を捧げつつ、ここに謹んで、哀悼の意を表する次第です。

以下に後藤均平先生の略歴、主要著作とご親交のあった諸先生方、先生から薫陶を受けた方々の追悼文を掲載します。

立教大学史学会